



A-TiC

広報誌エーティック・プレス

PRESS

株式会社 エーティック

SINCE 1973

研修を通じて「こうなりたい」自分を明確化

令和7年度がスタートし、3カ月が過ぎました。初夏を迎え、道内各地ではさまざまなイベントが開催され、人と自然が最も輝く季節が到来しています。公私ともに充実した日々を過ごされますようご祈念申し上げます。

当社は、昨年度に策定した長期ビジョンに基づき、社員のキャリアプラン策定や実行支援を進めています。本年度からは、新人と若手、中堅、ベテラン、マネジメント層の各年代に応じた研修を5月から開始しています。1クール2時間程度、それぞれの層で10人程度のメンバーで、私も加わってディスカッションします。

研修の目的は、技術者、営業マン、事務職としてのモラルとセンスを再確認することです。専門的な仕事のスキルは日々の業務の中で磨くことができますが、モラルとセンスを考え自分自身を見つめ直すことが、スキルの成長にも大きく影響します。この過程を経て、社員それぞれの人生における理念やビジョン（願望、なりたい姿）、目的（何のために、誰のために）をしっかりと明確化し、その目的を達成するための目標設定の方法や実践のポイントや会社のビジョンとの整合性を考えていきます。

ディスカッションを通じて感じたことは、自身の理念やビジョン、目的を明確化することで長期的な目標を言語化し、短期的な計画を立てて実践と内省を繰り返し、自身をブラッシュアップすることが大切だ、ということです。そして、思考のベクトルを他者に向けず、自分自身に向けることが成長を促し成功に繋がる、と感じました。

研修は私自身にとっても大きな意味を持っています。社員との対話を重ねることで「こうなりたい」と思っている自分自身や自社の進むべき方向性が見えてくるからです。研修はまだ始まったばかりで、人が育ち、それが会社の文化になるまでには年月がかかります。それぞれが輝く人生を送り成長することが会社の成長につながり、会社を信じて入社してくれた社員の選択を正解にする経営を実践することが、さらに企業の器を広げていくという信念を持って今後もチャレンジを続けます。

令和7年度を迎え、皆様のご健勝を心よりご祈念申し上げますとともに、今年1年も変わらぬご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。



代表取締役社長 舟田 幸太郎

未来を託して 新入社員4人をご紹介します

当社には令和7年度、新たに4人が入社しました。当社の未来を担う4人に仕事にかける思いなどを聞きました。



設計部道路河川課
中島 未鈴
Misuzu Nakajima

技術士補の資格取得に挑戦

苫小牧高専創造工学科で都市・環境を学び、建設コンサルタントに関心があり、説明会で金井さんや三上さんから、北海道の発展に貢献する会社とのお話を聞き、入社を決めました。今の仕事は現地踏査などが中心です。知らないことばかりですが、優しくて頼りがいのある先輩のもと、多くのことを学び、今年は技術士補の資格取得に挑戦したいです。白老町出身。22歳。

リーダーシップ発揮できる人材に

北海学園大学経営学部を卒業し、東京の建材メーカーに就職しましたが、1年半ほどで退職し、実家がある札幌市に戻ってきました。縁あって舟田社長とお話しする機会があり、人柄に魅力を感じ、6月に入社しました。現在は積算などの業務補助をしています。まずはしっかりと仕事を覚えて、いずれはリーダーシップを発揮できるような人材に成長できれば、と思っています。札幌市出身。24歳。



営業企画部
又野 稜太
Ryota Matano

何をなすべきかをしっかりと考えて

北見工大地球環境工学科で河床材料などの研究をしていました。会社説明会でエーティックを知り、その後若手の先輩と個別に話をする機会があり、入社しました。計測業務はエーティックの主力業務の一つであり、エキスパートを育てようという雰囲気があります。分からないことばかりですが、多くの現場を経験し知識を蓄え、早く一人前の技術者になりたいです。青森県弘前市出身。22歳。



計測コンサルティング室
野宮 良惟
Rai Nomiya

バックオフィスの一員として貢献

岩見沢緑陵高校を卒業し、民間企業勤務後に派遣会社採用となり、昨年3月からエーティックで働いていました。正社員のお声かけがあり、明るく楽しい雰囲気に魅力を感じて5月に入社しました。現在は経理・総務を担当していますが、派遣の時に比べ仕事の幅が広がり、やりがいを感じています。できることを増やし、会社に貢献していきたいですね。由仁町出身。25歳。



経営企画部
岩崎 瑠々
Ruru Iwasaki

能登半島地震

巡 検 報 告

～防災地質課のメンバーが現地入り～
今後の災害対応の貴重な経験に



工藤忠次長

エーティックでは、昨年1月に発生した能登半島地震の現地巡検（現地視察）をことし3月に実施しました。調査部防災地質課の9人が石川県内の被災地を訪れ、地すべりや液状化、斜面崩壊などの現場を巡検しました。大地震発生から1年余りが経過しましたが、現地では復旧が手付かずの施設などもあり、巡検を行った工藤忠次長は「今回の巡検を今後の災害に備えた貴重な経験としたい」と話しています。

輪島市や珠洲市など12カ所を巡検

巡検は3月26日から28日までの日程で実施しました。メンバー9人はフェリーと飛行機に分かれて石川県宝達志水町に集合。2日目の3月27日にメインの巡検を行いました。対象は輪島市や珠洲市、宝達志水町など8市町の12カ所。事前に2カ月ほどかけて国土交通省などのデータを基に抽出し、メンバーが目視で巡検しました。

被災の状況は、液状化や大規模盛土滑動崩落、海岸隆起、地表地震断層、斜面崩壊、地すべりなどさまざま。巡検時には大地震発生から1年余りが経過しましたが、崩れ落ちたままの斜面など、復旧が手付かずの施設などもあり、メンバー全員が地震被害の深刻さと、復旧の難しさを痛感しました。巡検は現地で調達したレンタカーで現地入りしましたが、移動中は「こんな所、通って良いのか」と思うような被災地もあったそうです。

が経過しましたが、崩れ落ちたままの斜面など、復旧が手付かずの施設などもあり、メンバー全員が地震被害の深刻さと、復旧の難しさを痛感しました。巡検は現地で調達したレンタカーで現地入りしましたが、移動中は「こんな所、通って良いのか」と思うような被災地もあったそうです。

若手中心に報告会を開催

巡検を終えて、若手を中心に状況などを整理し、5月15日に報告会を実施しました。同課の中里拓人さんが全体工程を説明した後、技術報告として、大島寛豊さんが「液状化現象に伴う側方流動について」、佐藤宥紳さんが「盛土崩壊のメカニズムと被災状況の報告」、佐藤隼人さんが「能登半島西部沿岸地域の海底隆起」をテーマにそれぞれ解説し、活発な質疑応答が行われました。

工藤次長は、今回の巡検について「皆初めての被災地入りでしたが、実際に災害現場を見ることで、リアルに被災の現実を体感できました。特に今回中心となって企画を実施した若手にとっては貴重な体験となったと思います」と振り返ります。その上で「北海道でも同様の地震が発生した場合、地域によっては復旧が遅れる場合もあります。今後の発生する災害と復旧に向けて、今回の巡検で得た知見などを活かすことができれば」と話しています。



アンカー付法枠の被災状況



崩積土と一緒に吹付けした応急対策状況

15

技術者列伝

田中 豊

前編

～近代橋梁工学の基礎を築いた理論家～



Yutaka Tanaka

土木学会附属土木図書館 提供

技術者として大きな転身を余儀なくされるも、新たな道において大成し、現在もその名を称えられる偉人、田中豊を紹介します。田中は鉄道技術者として業績を積みましたが、関東大震災後に橋梁復興を任されたことで土木技術者として大きな岐路に立たされます。しかしその技術力と研究心を糧に隅田川六大橋再建という偉業を成し遂げ、やがて橋梁界の第一人者と呼ばれるまでになります。彼の功績は多数の建造物とともに様々な分野に残され、その影響力は今も変わることがないのです。

○田中豊のおいたち

田中の父は旧長州藩士で両親は山口県にルーツを持ちます。田中は1888(明治21)年に長野市で生まれ、小学校時代に静岡市に転入、中学卒業後には鹿児島市の第七高等学校へ進学しています。その後1909(明治42)年に東京帝国大学工科大学土木工学科に入学します。大学で田中に橋梁工学を教えたのは廣井勇であり、「橋梁復興事業を成し遂げたのは廣井先生のおかげ」と後に田中自身が語っているように、橋梁技術者への転身に大きな影響を与えた一人でした。

○鉄道技術者としてのスタート

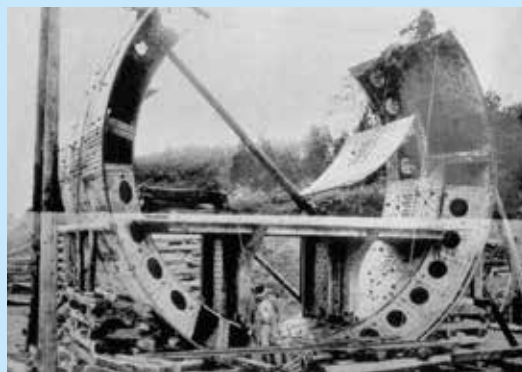
大学を卒業した田中は1913(大正2)年に内閣鉄道院技術部に入省、鉄道技術者としてのキャリアをスタートします。1915(大正4)年に配属された工務局設計課では、橋梁設計技術の国産化に尽力し後に東京帝国大学教授や鉄道官僚となる那波光雄が上司となりました。鉄道院時代の田中に橋梁設計の足跡は殆ど残っていませんが、橋梁学に通じた那波には非常に可愛がられ、その影響を受けたことは疑いありません。

工務局設計課では那波の主導の下、鉄道構造物の標準化が進められており、田中もこの業務に携わりました。当時の田中は非常な勉強家と評される、頭脳明晰な学者タイプで、設計実務よりも設計を理論的に補完する役割を担っており、鉄道橋の計算方法の理論的研究も行っていたようです。

1919(大正8)年、那波が総裁官房研究所(現鉄道総合技術研究所)の所長となった年には、田中も研究所勤務となり、益々研究色の強い役割を担っていくこととなります。

○鉄道院時代の功績

田中豊の鉄道院時代の功績の一つとして、羽越本線(秋田-新潟)折渡トンネルで適用されたシールド(盾構)開発が挙げられます。折渡トンネルは途中で膨張性地質の軟性泥岩頁岩層に当り、地圧が高く支保工が壊れるため工事が頓挫していました。この案件は総裁官房研究所在籍中の田中に持ち込まれ、海外技術を取入れ、複雑な構造の応力計算を実施して日本初のシールド工法が開発されました。

建設中の折渡トンネルシールド
(土木学会附属土木図書館提供)

このシールド工法は機械カッター式ではなく、人力で掘り進め水圧ジャッキでシールドを前進させる「手掘り式シールド機」で、実際に176mの区間を2年以上かけ掘削されました。シールド設計を依頼した秋田建設事務所で工事課長だったのが、後に復興局で上司となる廣井勇門下の太田圓三でした。

○海外留学時代

鉄道院で線路の線形やレール・枕木に関する研究を行っていた田中は1920(大正9)年、英国留学を命じられ、続けてドイツ・米国へ転学します。留学中の主要な研究は列車の高速運転に関するものでしたが、ドイツでは橋梁の調査研究も進め、欧州各国の橋梁資料を集めて日本へ送っていたようです。これらの資料は後に隅田川の橋梁を設計する際に非常に役に立ったようです。1922(大正11)年に帰国すると、留学の成果として高速運転に関する論文を発表しています。関東大震災が発生したのは、帰国からわずか1年足らずの1923(大正12)年9月1日の事でした。

○関東大震災の被害

関東大震災は神奈川・東京を中心に茨城・千葉・静岡など広い範囲に影響が及び、死者・行方不明者数が10万人以上と明治以降で最大の地震被害でした。被害が拡大した要因は、同時発生した台風との複合災害のため、木造住宅が密集する東京市は強風に煽られて火災が非常に早く広範囲に燃え広がりました(火災旋風の発生)。死者の多くは焼死であり、焼失面積は東京市の4割という大惨事でした。橋梁被害も甚大なもので、多数の木橋が焼失し、隅田川に架橋されていた鉄橋も5橋中3橋(国内初の鉄橋、永代橋を含む)が焼失する事態だったのです。



永代橋の火害状況(土木学会附属土木図書館提供)

同年9月27日に帝都復興院が設置され、技術者を集めて復興事業が発足しました。復興事業は大胆な区画整理に基づき、延焼遮断帯や中央分離帯を有した幹線道路・公園緑地などが含まれ、復旧の枠を超えて防火対策を勘案した大規模で先駆的な都市計画でした。震災を機に導入された施策として他にも耐震基準や防災訓練の実施、ラジオ放送による情報伝達手段の普及などがあり、これらは現代の災害対策の始まりとなったのです。

復興院土木局の局長に推挙されたのは鉄道省出身の太田圓三であり、同時に橋梁課長に任命されたのが田中豊でした。国内初の鉄製鉄道橋が1874(明治7)年に建設されて以降、橋梁技術が最も進んでいたのが鉄道省(1920年(大正9)年に鉄道院から移行)であり、鉄道省が主体となって橋梁復興が行われるのは必然でした。しかし理論には長けていたものの橋梁設計や実際の現場経験が少ない中で大任を排した田中の心境は、就任に際して恩師廣井勇を訪ね顧問就任を依頼した話からも想像に難くありません。廣井は顧問就任を断った上で「落ちないようにやればよろしい」と激励したのみだったのです。



井形 淳 設計部 技師長 工学博士 / 技術士(建設部門)

緊急事態で専門以外の仕事をこなす機会は誰にでもあります、その道で頂点にまで達する人は稀なのではないでしょうか。今回は技術者のキャリアを別の道からスタートしつつも、日本の近代橋梁技術を世界レベルまで高めた偉人、田中豊をご紹介します。

1967年札幌市生まれ。1993年室蘭工業大学大学院建設システム工学修了、1996年室蘭工業大学大学院建設工学修了。北海道開発局開発土木研究所を経て、建設コンサルタント会社に勤務。2015年(株)エーティック入社

働き方改革と 人材育成を实践



子どもと親に優しい WLB 実現を目指して

エーティックでは、働き方改革の推進とワーク・ライフ・バランス重視の観点から、産休・育休の取得を奨励しています。また、「なくてはならない会社」の実現に向けて欠かせない「人材育成」も最大の経営課題として重視しています。働き方改革と人材育成について、育休を取得した社員と、取り組みを推進する眞道一生経営企画部長に聞きました。

4月に1カ月の育休を取得

計測部に勤務する鳴海翔さん(26歳)は、今年3月に3人目の子どもが生まれました。5歳の長男、4歳の次男がいて、今回は女の子でした。4月に1カ月間の育休を取得しました。ゴールデンウィークと合わせると1ヶ月半ほどの休みとなり、家族とゆっくりと過ごすことができましたと言います。

4月はその年度の業務に向けた準備期間です。鳴海さんも毎年、5月中旬ごろから現場に向かう日々が多かったのですが、今回の育休はちょうど良いタイミングでした。

育休を初めて取得した感想としては「業務本格化の前だったので、休みを取る際の引き継ぎなどもそれほど大きな負担はありませんでした」と語り、その上で「リモートなど自宅にいても対応出来るような体制があってもよいのでは」と話しています。



産休と育休、時短勤務も

佐々木美由希さん(34歳)は、業務推進室で営業事務として働き7年目を迎えています。3歳の長女がいて、昨年の8月に次女が誕生しました。産休と育休は2度取りましたが、次女の時は、約9カ月の休みを取り、この春、仕事に復帰しました。復帰後も、保育園に通う2人の迎えは佐々木さんの役割。時短勤務の体制を取ってもらい、自転車で迎えに行く日々です。復帰に関しては「長女の時よりも短い育休でしたので、今回の方が仕事に慣れるのが早かった気がします」と話します。

育休、時短勤務に関しては「急に現場に行かなければならないという仕事ではなく、職場も取りやすい雰囲気があり、2人の娘と貴重な時間を過ごすことができました」と振り返ります。

2回に分けて育休を取得

調査部防災地質課に所属する佐藤隼人さん(33歳)は、昨年7月に長女が産まれた際に2週間の育休を2回に分けて取得しました。現在は3歳の長男とともに保育園に通っていますが、迎えは佐藤さんの役割。担当する現場が札幌市内のため、それほど無理なく迎えに行くことができる、と言います。育休を取得する際に、感謝しているのは会社の対応。「国の制度を利用したのですが、申請手続きがかなり煩雑で、担当する金井さんはかなり大変だったのでは、と思います」と話します。育休中の仕事については「育休は、上に幼い子どもがいる場合、妻が入院していることもあるため、夫の協力は不可欠だと思います。申請しやすい職場の雰囲気づくりと、育休中でも柔軟に仕事に対応と言います。



眞道経営企画部長

エーティックが目指すもの～眞道経営企画部長に聞く

ー産休・育休を取得する社員が増えていますー

当社は若い社員が多く、今後も取得を申請する社員が増えてくると思います。育児は夫婦共同するのが子どもにとっても望ましい。担当する業務の調整などの課題はありますが、働き方改革の推進が求められ、ワーク・ライフ・バランスが重視される中、社員が積極的に取得できるよう、社内体制や雰囲気作りを進めていきたいと思っています。

ー本年度からトップ自らが参加した社員研修が始まりましたー

4月に開催したACSグループ研修会で、若手や中堅、マネジメント層の各年代を対象とした研修会実施を打ち出しました。昨年策定した当社の長期ビジョンに掲げた「なくてはならない会社」「人が育つ会社」の実現に向けた人事ポリシーをまとめ、この中で社内研修制度の充実を明記しました。

ー具体的にはどのような内容ですかー

外部講師を招かず、社長自らが講師を務めています。研修では、ビジョンの狙いを説明した上で、グループディスカッションを通じて、参加者が自発的に考え、成長を促す構成としています。このビジョンでは、社員一人ひとりが幸せな生活を送るために、目的や目標、そしてその達成方法を確立することが求められています。今回の研修が、その理念を実践的に体現する場となることを目指しています。社員の成長なくして会社の発展はありません。この研修が当社の未来を拓くきっかけになってほしいと思っています。

道内トンネル文献あれこれ

令和6年12月～令和7年6月において、専門雑誌等に発表された、北海道内のトンネルに関する論文・報文等のリストを紹介します。トンネル関係者の方々へ最新情報を提供いたします。なお、詳細を知りたい方は弊社までお問い合わせ下さい。

国道・道道他

- 1 禰和英, 須藤敦史, 佐藤京, 兼清泰明, 丸山収, 檀寛成: 北海道におけるNATMトンネルの劣化遷移について, トンネル工学報告集, 第34巻, 1-29, pp1-6, 2024.
- 2 河村巧, 須藤敦史, 佐藤京, 兼清泰明, 丸山収, 檀寛成: 寒冷地(北海道)の矢板工法に対するトンネル覆工の維持管理について, トンネル工学報告集, 第34巻, 1-30, pp1-6, 2024.
- 3 日野道雄: 一般国道239号 苫前町 苫前トンネル工事, 北海道土木技術会トンネル研究委員会会報, No.76, pp.8-11, 2024.
- 4 岡崎雄一, 丸山貴久, 山田剛史, 高橋民雄: 熱水変質を帯びた低強度地山を円形二重支保にて克服, 2025トンネル技術研究発表会論文集, pp.47-53, 2025.
- 5 佐々木博一, 蟹江俊二: 蛇紋岩トンネルにおける先進ボーリングの活用方法の提案, トンネルと地下, Vol.56, No.5, pp55-65, 2025.

高速道路

- 6 水沼健次, 手塚聡正, 日野道雄: 道東自動車道 新得工事 広内トンネル, 北海道土木技術会トンネル研究委員会会報, No.76, pp.2-7, 2024.

新幹線・鉄道

- 7 久河竜也, 浦越拓野, 小原雄一: 間隙水圧変動を利用した海底トンネル周辺地山の水利特性の把握に関する検討, トンネル工学論文集, 第34巻, 1-3, pp1-16, 2024.
- 8 牛田智也, 嶋本敬介, 野城一栄, 小原雄一: 海底トンネル内空変位管理値の数値解析的検討, トンネル工学報告集, 第34巻, 1-7, pp1-10, 2024.
- 9 青木雄大: 北海道新幹線 幌内トンネル, 北海道土木技術会トンネル研究委員会会報, No.76, pp.12-16, 2024.
- 10 大塚優作, 若公雅敬, 樋口哲哉, 波柴拓也: 新幹線保守設備の設置に向けた分岐を伴う大断面トンネルの施工, トンネルと地下, Vol.56, No.1, pp.7-15, 2025.
- 11 小山西綺羅, 諏訪至, 山口洋介, 幸谷勇作: 突発湧水への緊急対応と掘削再開への対策ー北海道新幹線 渡島トンネル台場山工区ー, トンネルと地下, Vol.56, No.2, pp.7-17, 2025.
- 12 岡村貴大, 山田聡史, 諏訪至, 若公雅敬, 中西諒: 最小土被り1.5mの下線直下における施工計画および施工報告ー北海道新幹線、磐石トンネル(北)他ー, 2025トンネル技術研究発表会論文集, pp.35-46, 2025.
- 13 江島武, 赤澤正彦, 柏木亮: 北海道新幹線におけるトンネル坑口部の設計・施工, トンネルと地下, Vol.56, No.5, pp.7-13, 2025.
- 14 佐藤新二, 野城一栄, 橋本浩一, 菅原拓朗: 青函トンネル防災システムの歴史と次世代システム開発方針, 土木学会論文集, Vol.81, No.4, 2025.
- 15 小林治生, 後藤裕太郎, 小林等, 青木雄大: 坑内外からの対策工を駆使して地すべり地帯を突破ー北海道新幹線 幌内トンネルー, トンネルと地下, Vol.56, No.3, pp.7-14, 2025.

その他

- 16 丹生屋純夫, 畑浩二, 青柳和平, 松井裕哉: 幌延深地層研究センター周辺で発生した地震による立坑掘削損傷領域への影響, トンネル工学報告集, 第34巻, IV-1, pp1-6, 2024.
- 17 青柳和平, 尾崎裕介, 大野宏和, 石井英一: 堆積軟岩を対象とした高レベル放射性廃棄物模擬処分坑掘削時の岩盤損傷の発達状況, 第16回岩の力学国内シンポジウム 講演番号49, pp269-274, 2025.
- 18 末武航弥, 緒方奨, 安原英明, 青柳和平, 乾徹, 岸田潔: 大規模三次元連成解析に基づく幌延深地層研究センター350m調査坑道での掘削ー長期透水試験に対する再現シミュレーション, 第16回岩の力学国内シンポジウム 講演番号49, pp304-309, 2025.

■ACSグループ研修会を実施

2025年度ACSグループ研修会を4月21日、本社2階協創ラウンジで開催しました。「全社研修会」を一昨年度から「ACSグループ研修会」に改称して3回目の開催となる研修会では、2024年度からスタートしたグループの今後の10年を展望した長期ビジョンを舟田幸太郎社長が説明。人事ポリシーに基づき、若手や中堅、マネジメント層の各年代を対象とした研修会の実施などを決めました。



各年代を対象とした研修会実施を決めました

■上期安全大会を開催

2025年度上期ACSグループ安全大会を5月15日に本社2階協創ラウンジで行いました。舟田幸太郎社長は「安全の本質はコミュニケーションです。安全対策の趣旨、目的、手段を今一度再確認し、無事故・無災害を達成しましょう」との決意を語りました。大会では、霜出睦安全衛生委員長が、熱中症予防対策や2025年度活動計画を説明しました。大会の最後では、社員を代表して計測部の時田圭寿さんが決意表明しました。



「安全の本質はコミュニケーション」と呼び掛ける舟田社長

■本社社屋をリニューアル

2022年9月に竣工した本社社屋のリニューアルを実施しました。2階の協創ラウンジと3階の執務室を対象として、協創ラウンジでは、これまで入口の通路付近に配置していた雑誌や新聞などについて、キッチン前に集約し、情報スペースとして利用しやすくしました。また、3階には、マネジメントエリアを設け、そこにマネジメント層が集まる形の配置にしました。今後もより機能的で快適な執務空間の実現に向けて改良を重ねていきます。



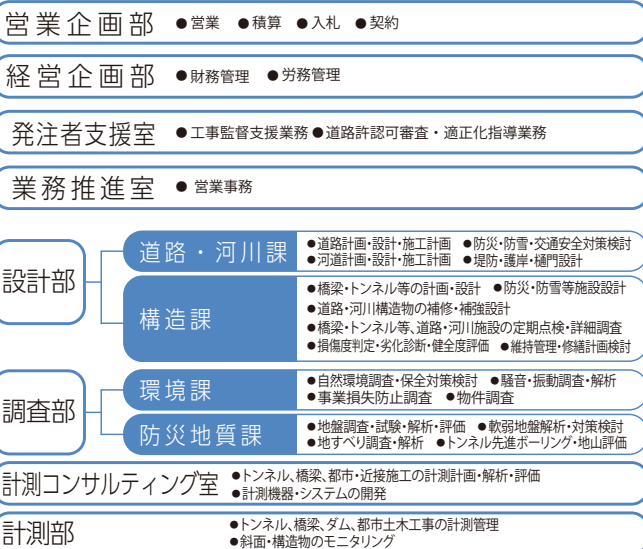
情報スペースとして再編成しました

株式会社 エーティック 会社概要

- 商号 株式会社エーティック
- 代表者 代表取締役社長 舟田 幸太郎
- 所在地〈本社〉札幌市西区二十四軒1条5丁目6番1号
- 創業 昭和48年1月31日
- 資本金 48,000千円
- 従業員 99名
- 事業所 札幌本社 東京支店 函館支店 道央営業所 旭川営業所
- 表彰

令和6年	北海道開発局	局長表彰受賞
	北海道開発局	札幌開発建設部 部長表彰受賞
令和5年	北海道開発局	局長表彰受賞
	北海道開発局	小樽開発建設部 部長表彰受賞
	北海道開発局	旭川開発建設部 部長表彰受賞
	北海道開発局	稚内開発建設部 部長表彰受賞
令和4年	北海道開発局	局長表彰受賞
	北海道開発局	小樽開発建設部 部長表彰受賞
	北海道開発局	網走開発建設部 部長表彰受賞
	稚内建設管理部	優秀現場代理人表彰
令和3年	北海道開発局	局長表彰受賞
	札幌開発建設部	部長表彰受賞
	北海道開発局	留萌開発建設部 部長表彰受賞
令和2年	北海道開発局	帯広開発建設部 部長表彰受賞

組織図



編集後記

7月を迎え、北海道でも本州並みの暑い日々が続いています。地球温暖化の影響なのか、「夏は涼しい北海道」というかつてのイメージが完全に変わりつつあると感じています。熱中症対策にも万全を期しながら、キャンプやバーベキューなど、アウトドアのイベントを楽しみ、短い夏を満喫しましょう。

広報委員会 広報誌部会